Big Project file. 1

みんなでつくる「七里ガ浜の夏祭り」

芹澤 明彦　第39回 夏祭り実行委員長

地域の夏祭りと聞いて皆さんはどんな事を思い浮かべるでしょうか？

会場となる神社や、その参道に並ぶ屋台、広場にはやぐらが立ち、近所の人が盆踊りを踊る。人々の笑顔で地域の素晴らしさを感じる瞬間です。

我が七里ガ浜でも、そんな住民たちの活気みなぎるイベントが、毎年8月中旬の土日に行われています。２０１４年、僕がお祭り運営に参加するようになって見えてきたもの……それは、お祭りの原点とも言えるコンセプト、「住民自らがとことん楽しめるお祭り」です。

その象徴は、七里ガ浜の参道ならぬプロムナードに並ぶ出店ブース。お店を営業するのは、他ならぬこの地の住民達。メニューの考案、材料の仕込み、保健所への届け出も出店する住民自らが行い、当日は売る人と買う人の両方が住民同士です。お祭りのメインとなるステージも同様。華やかダンスや楽器演奏、空手の演舞まで、スポットライトを浴びるのも声援を送るのもこの街の住民です。

そう、この街のお祭りでは、全てにおいて〝住民の住民による住民のための〟が貫かれているのです。

七里ガ浜ならではの特徴はそれだけではありません。祭りの運営を担う実行委員会のメンバーは自治会理事を中心に、商店会、関連の団体の要職者、当然ながら地域の重鎮達も顔を揃えます。しかし、それらを束ねる実行委員長をなんと若手世代が担っているのです。『ベテラン勢は脇をしっかり固めておく、だから、祭りのコアであるエネルギーは若手が生み出してほしい』という重鎮達の考えがあると感じます。

「そんな役、出来るのかな？」。私がその任を仰せつかったのは引っ越してまだ5年目、２０１６年の夏でした。

「せりちゃんの好きな様にやっていいよ」自治会長や先輩方から励まし？の声の中、新年度の始まりに合わせて祭りの準備がスタートしました。

この年、七里ガ浜の住宅街は大きな節目を迎えていました。それは、住宅街の冷蔵庫と言われるＳＥＩＹＵがリニューアル工事を実施していたのです。夏祭り当日には間に合う予定だったものの、建物や周辺スペースの変化に合わせ、お祭りのレイアウトを変更する必要がありました。我々若手世代の多くは、平日は仕事に追われ、休日も子育てや教育に追われる生活です。そこで、ＳＥＩＹＵとの折衝や役所との調整は、重鎮理事や事務局にお願いし、我々は出店のレイアウト（いただいた参加申し込みを、出店内容によって振り分け、全体の会場をデザインしていく作業等）に取り組みました。

１６００世帯を超える家族とその親戚や友達が集まり、お祭りの来場者数は、二日間で述べ１万人を超えると言われています。その全ての人たちがステージを楽しみ、出店のゲームや食べ物に舌鼓を打ちながら、住民同士の会話を楽しむひと時。様々な理由でこの場所を安息の地と選んだ人たちが、夏祭りという瞬間を通じて結びついていく。少子高齢化の世の中、街の活性化が叫ばれる現代において、これからも若者とベテランがそれぞれの得意領域を補いながら、年に一度のこの機会を大切にし、活気とともに後世に伝えていけたらと思います。

Big Project file.2

バトンでつないだ「ギネス世界記録」

白石 徳宏　ギネス実行委員会会長　　**作佐部 豊**　ギネス実行委員

夏祭り40周年。

「ギネスの世界記録に挑戦したら?」と誰かが言った。「出来る訳ない」と誰かに言われた。「やめちゃえば?」と。40周年に向けて何かちょっとした企画でもと出てきたアイディアが「ギネスに挑戦」。誰もが思った「悪い冗談にもほどがある。誰がやるんだよ?」。

たぶん自治会始まって以来の一大イベント。問題は山積みで先立つものはなく、競技場所も決まらず、天候に左右されやすく、事前に募った1600名の走者名簿も穴だらけ。リスクは山のように高かった。実は、この直前、資金も人材も潤沢な全国JC(社団法人青年会議所)が挑戦し、まさかの失敗に終わっているのだ。「正規軍が失敗したのに田舎の村のゲリラ兵が挑戦するのか……」。

ただ、七里の人達は個性的で優秀な人達ばかり。専門性が高いプロフェッショナルな仕事をこなす、間違いなく素晴らしい人材が揃っている(いつも思うのが、「こんな仲間と仕事ができたら最高だろうな」と)。

その年の夏は40年ぶりの悪天候で、夏とは思えない長雨。不安だらけの毎日を過ごしたが、運も味方につけたのか、当日は一転して晴れ上がった。諦めなかった者に、チャンスという挑戦権は与えられるのだ。さぁ、準備は整った。仲間への想いを込めて「今日、世界に挑戦しよう!」

このようにして小さな街の挑戦は実を結び、参加者みんなが世界記録保持者になりました。子供のような夢を見て、大人になってもがき続け、諦めの悪い愚か者だからこそ実現できた、〝世界一〟。

快く協力してくださった西友七里ヶ浜店様、ココカラファイン七里ヶ浜店様、そしてバトンをつなげた皆様、夏祭り実行委員会様あっての快挙だったと思います。世界一になったことも誇らしいですが、参加された皆様に、結果以上に大切なもの、忘れられない思い出を残せたことが何よりも嬉しいです。(白石)

誰もが挨拶しあえる繋がりを目指して

夏祭り40周年。何かちょっとした企画をと始まったはずが、気づけば「ギネスワールドレコードに挑戦。1600人の輪」、こんな大きな企画になるとは…。たった1600世帯程度の小さな町で、果たして1600人もの人が集まるのか?ギネスという世界は、開けてみたら難題だらけ。ギネスの厳密なレギュレーション、場所やスタッフの確保など、思い返せば苦難ばかりの道でした。

この街もいつの間にか自治会発足50周年を迎えました。ここには、古くからのお年寄りもいます。新しく移り住んできた若い方もいます。でも、そこには、「しらんぷり」という大きな溝があります。そんな溝は無くしたい。そんな思いで「1600人の輪を創ろう」という企画に発展しました。たとえ知らない人でも、道ですれ違えば挨拶の飛び交う町にしたい。「お早うございます」の挨拶の声が聴こえる町にしたい。こんな小さな町だから。どこかで皆さんが繋がる場を創れたら楽しいだろうと、この企画ができたのだと思います。

最後に。ご協力くださった皆様。ご参加頂いた皆様に感謝。(作佐部)

Big Project file.3

七の心をつなぐ「七七支援隊」

中里 成光　七七支援隊（七里ガ浜発 七ヶ浜復興支援隊）隊長

２０１１年4月、初めて訪れた宮城県七ヶ浜の町と海には想像を絶する景色が広がっていました。七ヶ浜町の被災記録は津波浸水高：12・1M、津波浸水域：町の1／3、死者96名という悲惨なものでした。

鎌倉に戻る車の中で決めました。この町の住民に笑顔が戻るまで応援し続けよう、そして自分達の住む鎌倉の防災もどうにかしなければと。まずは力を集結し、〝継続〟を念頭に『七里ガ浜発　七ヶ浜復興支援隊』を立ち上げ、２０１１年6月18日に第1回ボランティアバスの運行となりました。熱い思いをもった48人の仲間と、まずは海岸の清掃からスタート。海に対して恐怖しかない住民の皆さんにその恐怖心を少しでも取り除ければとの活動です。

活動は七ヶ浜災害ボランティアセンターの指示による瓦礫の撤去、そして8月からは仮設住宅の支援活動も並行して行い、初回は七里ガ浜の夏祭りで定番となった流しそうめんを仮設住宅のある広場で開催。その他ダンスや木工、アロマ、落語のワークショップなど様々な催しをもって、つかの間のほっとできる時間作りを行いました。

活動の転機となったのが、仮設住宅サポートセンターのスタッフと話しこんだ結果スタートした畑づくり。ボランティアという視点を変えて、住民の方と一緒に地を這い土を耕し、2か所の仮設住宅敷地内に『七七畑』が完成。住民の方々は思い思いの苗を持ち寄り、朝に晩に畑に通い共に復興に向け協力し合いました。『七七畑』を中心に自然とお互いの関係がつながり始め、『七の心をつなぐ』を目指した活動が形となってきました。

七里ガ浜では、自治会を中心にこの活動を〝10年続ける〟と誓った支援隊を全面サポートして頂きました。特に、七ヶ浜名産の焼きのり販売では、毎回多くの方にお買い上げいただき、今では七里ガ浜は七ヶ浜の上得意先になっているようです。

今はこちらから出向くだけではなく、定期的に七ヶ浜の方々が鎌倉にお越しになったり、２０１６年からは鎌倉市中学生防災サミットに七ヶ浜の中学生が参加してくれたりと、我々の住む町の防災への気づきを与えてくれています。

そして震災から8年を迎えた２０１９年3月には、七ヶ浜国際村のミュージカル『ゴーヘ』の公演を鎌倉芸術館にて行うことができました。ここには劇団員だけでなく寺澤町長はじめたくさんの町民も駆けつけてくれ、まるで七ヶ浜からの民族大移動がおきたようでした（笑）。

東北の復興を思い、そして現地で学び教えて頂いたことをわが町に持ち帰るという、「何かできないか」から始まった活動が、今では東北の親戚に逢いに行く感覚へと自然と変わってきました。

『七の心をつなぐ』、点と点が心を通してつながりお互いを思う。そんな七里ガ浜と七ヶ浜が、さらに共に手を取り歩み続けられる事を心より祈ります。

結びに、七七支援隊の活動にご協力いただいた自治会関係者の皆様、住民の皆様に感謝を申し上げます。これからも共に素敵な街づくりができますように。

Big Project file.4

園児のパパが地域と連携「かえでPapas」

渡部 達弘　『かえでPapas』OB、自治会顧問

「七里ガ浜自治会は若手の理事やスタッフがたくさんいていいね」とよく言われますが、実は、その人材の大きな供給元になっているのが、この『かえでPapas』なのです。

『かえでPapas』は、地元の楓幼稚園を母体とした、お父さんが集まる団体。今ではイクメンという言葉がすっかり定着しておりますが、『かえでPapas』のパパたちは、は、そのもっと前から、子育てを積極的に楽しんでいました。

スタートは、園児の父親有志で作った小さな集まりでしたが、次第に横へ広がり、幼稚園行事にも参加するように。そして、2006年にはついに楓幼稚園の正式団体となりました（ちなみに最初は『ダディーズ』という呼称でした）。

その活動は、園内行事にとどまらず、しめ縄作り、BBQ、地引き網、虫取り、プロムナード清掃活動など多岐に渡ります。趣味が高じてカネフラ（男性のフラダンス）の地元チームを立ち上げたりもしています。また、自治会夏祭りでは恒例の流しソーメンを行い、早朝の竹取りから始めます。

2016年の『かえでPapas』10周年記念事業では、園にピザ窯を進呈しましたが、そのときも、検討―設計―仕入れ―施工と、現役、OBを問わず結束して遂行。自治会のイベントでも、「コンテストステージが欲しい！」と言えば、組み立て式のステージを作り、夏祭りで子ども向けの出店が必要と言えば、おもちゃの当てくじ、わなげ・かき氷・ポップコーン・スマートボールなどを手伝います。

このように、有事の時はひと声かければすぐ集合し、それぞれの専門分野で知恵を出し合い実現します。

『かえでPapas』は、役員を決める際も少し変わっています。通常、こうした団体の役員を選出するとなると、「誰かやってくれないかなぁ」と時間がかかるものですが、ここではみんなが立候補、あっという間に決まります！　しかも人数も数人レベルではなく、十数人になることも。これを聞くだけでも、どれほど魅力的な団体か分かりますよね。パパも育児を楽しむことで、子どもは笑顔になり、家族は明るく、そして地域全体が元気になっていきます。

さらに、こうしたムーブメントは、育児中にとどまらず、子育てが終わってからも、地域の自治会活動への参加という形で引き継がれることになります。これら一連の活動が、教育と地域の連携した取り組みとして認められ、2017年には「地域学校協働活動」推進に関わる文部科学大臣賞を受賞しました。

今では、Papasのメンバーが自治会の理事や評議委員にも多数抜擢され、地域や自治会にとっての大きな原動力であり、重要な「インフラ」となっています。

七里ガ浜は、海も山もあり、子育てをする上でもとても素敵な環境です。そんな土地柄に惹かれて多くの方が移り住んできています。わたしもその一人でした。そして17年経った今でも、この七里ガ浜が大好きです（サーファーならなおさらですね！）。

Papasでの出会いをきっかけとして、若い世代が生涯、地域につながっていくという、よい循環・環境がこの街にはあります。